

「俺が付け替えてやろう」と付け替えてくれ、私は感激のあまり涙が頬をつたった。

昭和十九年三月十一日入隊以来、曹長殿や軍曹殿のように優しく親切にされたのは初めてであり、この時人間の温情を肌にした。それから数日後、六月十日頃と記憶するが、病気も回復し曹長殿、軍曹殿に礼を述べ本隊に帰隊することができた。

その頃のビルマは雨期に入り、毎日雨が降りうとうとらしい日が続いた。そんなある日突然、日本に帰る日が近いとの噂が流れ出した。半信半疑でいたが、数日後、全員身体につけている物を煮沸消毒せよとの通達があった。ドラム缶に熱湯を沸かし一人ずつ全裸になり衣服を放り込み五分間ぐらいで引き上げるのだが、雨が降って屋外に干せないから、宿舎内に拡げて干す。衛生隊の応援を受け頭を刈り髭や体毛を剃り、クレンジング液を入れたドラム缶に五分間入る。てんやわんやの大騒ぎであった。

六月二十九日、サルイン河の河港に復員船が入港、

六月三十日乗船、夢にまで見た祖国日本への帰路に就く。我々は愛する家族を守るため従軍したが、圧倒的な連合軍の軍事力に対して肉弾戦闘を繰り返して、マリアやアマーバ赤痢等の疫病に冒されながら命運つき、壮烈な最期を遂げたのである。いずれにしても数百万人に達する日本軍将兵の貴い犠牲の基に今日の日本の平和の礎が出来上がったのである。

私は武運に恵まれ九死に一生を得て生還出来たが、遠い異国の地で祖国日本の繁栄と愛する家族の幸福を願い、無念にも壮烈な最期を遂げられた戦友の姿が忘れられない。心から御霊に哀悼の意を表します。

ビルマ、ミートキーナの戦闘

― 帰って来た英霊 ―

長崎県 濱崎 英治

五十余年も前のことで記憶も薄れておりますが、大東亜戦争の終末、日本では無条件降伏ということで終

戦を迎えました。

私、濱崎元一等兵は、名誉の戦死の公報を受けて村葬も済み、暮れには木の墓標まで建ててありました。私は奇跡的に生還してそれを知り、自分で自分の墓標を引き抜いて家に担いで帰ったのです。何と言っているのか、言いようのない思い出です。

昭和十九年七月二十五日のこと、ビルマ戦線で、菊部隊（第十八師団）救出のために、戦場の第一線で敵弾が雨霰のごとく降る中を、死守を覚悟で次の命令を待機していました。その時、敵の自動小銃や手榴弾の直撃を受けました。弾は腰から大腿部を貫通し、手榴弾の破片創は数カ所に及びましたが、その時右眼に破片が刺さり、視力も落ち、痛みに苦しんだのです。

体の各所の傷口には、二、三日の間に蛆虫がわき、その蛆虫が白くコロコロに太り、傷口に群がり吸いついて離れません。離そうとして手で引っ張っても、これを離すだけの力がもう私にはありませんでした。倒れたままで起き上がろうとわずくまっていると、眼前

に敵の大型爆弾が投下され、その爆風で吹き上げられた泥を被り、泥だらけになりました。

爆弾の跡の家ほどもある大きな穴に驚き、私はうつ伏せのまま気絶していたところを戦友に抱き起こされました。戦友は付近の丸太や板切れを集めて筏を組み、筏から落ちないようにとの願いを込め、私をよく括り付けてイラワジ河に流してくれました。

下流には日本の野戦病院がありました。流れ着きさえすれば傷の手当てもできるだろうと、戦友の好意も善意ととらねばなるまいが、イラワジ河は雨季ともなれば、一五〇〇メートルから二〇〇〇メートルもの川幅となり、激流や濁流のものすごさは知る由もなかったでしょう。

日本の野戦病院では何とか傷の手当てもできよう、との思いは自分でも察知はできましたので、流されるままに濁流、激流に巻き込まれていました。しかし、頭・腰・足と痛むところばかりで、痛みの辛さと絶望感で生きる気力も全く失せてしまいました。

何日漂流したのか判りませんが、気が付いてみると

自分は白衣に包まれて、真っ白なベッドの上に寝かされてきました。何か、訳の分からない言葉で「がやがや」言っています。何が何だか判らず、辺りを見回しあつげにとられていると「心配せんでもよい、傷が治れば日本に送り返してやる。お前が悪いのではない。」上に立った人が悪いのだ」と言っていると、通訳の人が教えてくれました。

考えてみれば我々は日本兵です。一層不安は増すばかり。連戦連勝の時ならば、一人残さず戦友が共に行軍してくれたものを、敗戦による撤退とあらば、イラワジ河に流されたのも無理ないことです。今更のように、情け無く悲嘆の涙に明け暮れていました。敵の捕虜になることは、何とも不名誉なことだと思ふけれども致しかたなく、運を天に任せるよりほかはありませんでした。

連合軍の病院では、親切に清潔に、毎日を善意で取り扱ってくれました。こうなつては、もう甘んずるより方法はないと決心しました。そう心を決めてからは、日ごとに案になり、のん気に暮らすことに努めま

した。気を案にしていると傷の治りも早まりました。

日本に帰される日がきました。船に乗ったのですが方向が判りません。どこを向いても海ばかり。何日か経ってから島が見えてきました。その島、陸地が名占屋港とは、実にありがたいことでした。

下船すると検疫の知らせがありました。何はともあれ、早く家族を安心させなければなりません。その一心で家路を急いだのです。

時は、既に昭和二十年八月十五日の終戦の日は過ぎていました。私の留守宅では、故濱崎一等兵は名譽の戦死をしたとはいえ、章という二歳半にもなる愛児も病死させているので、毎日を淋しい思いで日を送り「戦争がもっと早く終われば主人も健者で帰れたものを」と悲嘆の涙で明け暮れていました。

そのころ、隣村の森瀬という方がみえられ、家内に「貴方の旦那の英治君は、元気でいますよ、きつと帰られますよ」と戦場からの伝言を伝えてくれました。これは、私が早く家のものを安心させてくれと伝言を頼んでいたからでした。

家の者たちは聞いて驚き、「本当だろうか」と信ずる気持ち、村葬まで済み、墓所には墓標まで建ててあるのだからと、信じられない気持ち。でも信じたい、元気な姿で帰った主人を見たい。でも、信じられないの気持ちの交錯する日々が続いたといえます。

後で森瀬さんは役場へ調査に行かれたそうです。やはり「名誉の戦死」の公報がきて、村葬も済んでいたの、英治さんが元気にいるという伝言をしなければよかったですと悩まれたそうです。早まったことをした後悔されたということを、家内は噂で聞いたといえます。

私、濱崎一等兵が奇跡的にも生還したのは、昭和二十二年六月二十四日でした。私が、家の戸を開けて「ただいま、今帰った」との声を聞いて、家族一同みな、驚き喜びました。家内は「やはり、森瀬さんの伝言は本当だった。元気な姿で目の前に現われた時、言葉も出ず、涙も出せず、ただただあ然と立ちすくんで、本当に言いようのない思いがした」と言っています。私も家内や家族が驚き喜ぶ姿を見て、言葉もあ

りませんでした。

両親へも帰国の挨拶をし、親の心配と喜びの大きさをつくづく感じました。これで私も落ち着くことができました。

言葉を交わしている間にも、子供のことが気にかかり「章はどこにいるのかな、もう四歳半ぐらいになるはずだ、もう大きくなったろう」と辺りを見回しました。その時、家内のナツヨは涙ながらに「おじいちゃん、おばあちゃんが、濱崎家の後継者だからといって、大切にかわいがってくださり、私も、貴方と私の優しい子として大事にかわいがって育てましたが、一歳半ころのこと、病気になって死んでしまいました。お医者様も一生懸命に治療を施して、一睡もせず看病したのですが助かりませんでした」と話をしてくれました。私は「そうか、やはりあの時、別れに来てくれたとばいなア。敵前の壕の中で、肩まで水に浸り、死守している時、背中に負われに来た。あの時が別れに来てくれたとたいねエー」と、私も涙を流しました。家内は申し訳ない気持ちでいっぱい、私も皆も、

逆に慰める言葉もありませんでした。

私が落ちて着いてから、家内たちは、名譽の戦死の公報のことを話して、夫婦二人で墓に行き、墓所の木の墓標を夫婦で抜き取り、私は自分の墓標を担いで家に帰りました。

後に家内はある人に、「戦死になっていた主人が、どんな思いであったのでしょうか。主人はただ一言、戦死の公報とは全く、何とも、といっただけでした」と話したと聞きました。

私がビルマで負傷した傷は治ったようでも、帰国後もその傷が痛み、歩行も困難で、冬季の痛みは耐え難いものがあります。また視力も○・三と弱視となり、生活に支障を来たすことになったので、病院で医師の診療を受け、加療の毎日でした。

戦後五十余年を経過した今日、今更ではありませんが、戦争は決してあつてはなりません。あまりにも犠牲が多過ぎます。

私は「平和の礎」を拝読いたしました。戦争体験に

ついて、私の体験と重なりあつて、お互いに戦場での労苦に涙が出る思いでした。この事業に献身的な活躍をされている方に感謝申し上げ、戦争の労苦と、平和の尊さを語り継ぐことを使命とし、世の中の浄化に寄与されますことを念じております。